

フォーラムIIの概略

フォーラム名：「学んで、歩いて調べたわが街の介護施設」一団塊の世代が地域の介護施設を訪問した体験から、①ボランティアとして何を支援できるか？②将来、どんな施設に入所できるか？—等を話し合います。

場所：御影クラッセ会議室 開催日：平成 22 年 2 月 20 日（土）、13 時 30 分～16 時

● フォーラム II の目的

昨年 4 月から行って来た本事業の活動の総集編として、当事業の参加者ならびに一般参加者を対象にして開催。特に、団塊の世代による介護施設の訪問調査に焦点をおいた。

プログラムは、①本事業の位置付け、②アンケートならびに訪問調査による結果分析と考察、③訪問調査者による施設訪問感想、④地域包括支援センターのアンケート結果、⑤パネルディスカッション（テーマとしては、●地域の団塊の世代が、将来自分自身あるいは親類縁者が介護施設を選択するに必要な条件。●地域のボランティアとして施設に何が貢献できるか等をフロアーと検討する。）

●結果ならびに考察

- ・訪問に対するアンケートならびに訪問調査結果、ならびに訪問者が口頭で発表した感想等については、当日の配布資料を参照。（ご希望者には資料を提供いたします）

●フォーラムの概要と考察

- ・訪問調査者からの報告・感想については、4 名の報告者が 6 施設の訪問の感想を率直に、自分の言葉で語っていただいたのが好評であった。

●パネルディスカッション（3 名のパネリストとフロアーからの意見として）（資料提供可能）

「団塊の世代は、㊶どこに注意して施設を選ぶか？ ㊷ボランティアとしてどんな支援ができるか？」

㊶どこに注意して選ぶか？

- ・ 近さ第一。訪ねて行ける。見学時に施設長が案内よりも、こちらの話を聴いてくれるかがポイント。利用者の笑顔、集い方、周辺症状へのスタッフの対応。施設と家族の協働体制
- ・ 近さ、スタッフの笑顔と挨拶と態度。入った瞬間の独特の臭いの有無。スタッフの清潔に関する教育。個人としては、施設入所は避けたい。
- ・ 単純に言えない。97 歳の父の入所先を探した話。家族だけの話し合いではなく、まず本人の意思を確かめるのが尊厳。
- ・ 大和先生から、在宅継続が望ましいが最後に入所は避けられないと考えて、地域に根ざした施設づくりに貢献を。

質問 1. 施設ではどのように過ごしておられるのか？

- ・施設の種類によって異なるが、特養では、起床も、おむつ交換も、食事も一斉に「よーい、どん！」方式。昼間は介護度にもよるが要介護度 3 近辺では、わりとお元気である。

質問 2. 遠距離介護（フロアーから広島の母の事、グループホーム入所のお話があった。）

- ・娘のそばに行くより、慣れ親しんだ地域で暮らす。同じ方言の飛び交う場所が良い。
- ・老人会、自治会との交流や連携が盛ん。地域の関わりが安心感を生む。良い所に入ったと。

質問 3. スタッフの待遇は入所料金と関係があるか？

- ・いろいろな施設があり、一概には言えない。
- ・現在の報酬では将来展望が見えない。施設には定員があり収入が頭打ちになるから昇給に不安がある。国民が福祉と負担の関係を考えないと。

⑨どんな支援ができるか？

- ・ 団塊の世代はいろいろな知識・能力がある。NPO法人が施設へ仲介・働き掛けを。音楽療法、お買い物、ハモニカ演奏、昔懐かしい童謡で居眠りから目覚めることもある。トイレ誘導でも、最初の声掛けはできる。ボランティアの受入れ体制が必要ではないか。
- ・ 在宅でお年寄りを見ている人がたくさんいる。その人たちの介護知識・ノウハウ・技術などは役立つはず。受け入れ側はあまり堅苦しく考えないで良いのでは？
- ・ 車いす外出は、事故の際の責任問題があり消極的。しかし、手が欲しいとは思っているのでボランティアのやれることはある。入り込んで、話し合っ、ニーズを形にする。“ムリヤリボラ”（自己満足の一方向的なボランティア）も見受けられるので要注意。
- ・ 施設側から：ボランティアが施設の中に入ってきて、少しずつ分かっていただく、施設側も自らに問いかけていくことが必要。お互いの接点を探っていく。在宅生活の方が多いため、施設でのボラ活動を勉強の場として使っていただくことも施設側の役割として“アリ”か。

●地域包括支援センターに対しては、どんなボランティアが考えられるか？

- ・ センターの中でお手伝いをするようなものはあまり思い当たらないが、総合相談の業務の支援として、施設を決めるお手伝いができないか。自分の経験では、HPに出てくる程度のもが一覧表になったものをくれただけということもあった。今回の調査のような情報収集やファイリングといったことで役に立てないだろうか？
- ・ 行政側から：情報をきちんとお伝えすることが大切。地域包括支援センターは委託も含めて行政の一部なので、公平・公正の観点から、施設に優劣をつけることは馴染まない。市民・NPOがマッピングしており、センターがそういうところを紹介するという形なら可能ではないか。これとは別に、介護保険サービスが100%ニーズに応えるのは無理なので、例えば、家庭で介護者が病気になったり、買物にいく時間が欲しいといった場合に、そのニーズに応えるような支援をお願いしたい。
- ・ 大和先生から：今、お話の出た、お隣の独居老人のヘルパーの世話の仕方についての心配ごとを地域包括支援センターに相談に行ったといったことは、センターの活用方法として非常に良いケース。“あんすこ”は、非常に忙しいので、来るのを待つのでなく、こちらから訪ねていくことが必要。
- ・ フロアーから：特定高齢者は、実は健診結果から状態を把握して選別している。言い換えれば、健診に来れない様な“訳ありの方”が選別の対象外に置かれている。これが大きな問題点。もう一つ、介護予防は身体的な予防が主。一人暮らしや老々介護世帯、抑うつ状態の人がかなりいる。身体状況だけでなく、心身両面で個々人の問題をトータルに捉えた、いわば「生活機能低下予防」が大事なのではないか。
- ・ 大和先生から：ひきこもり、とじこもりの人たちが居ることに、普段から地域の住民が感度を上げておくことが大事。民生委員が面会を拒否されてもそこに昔から住むなじみの人は面会できることがある。民生委員にはネットワークの中で頑張ってもらう任務も

ある。

- ・ その他の方々：
 - ・ 個人ボランティアはどんな人か見極める必要があるし、急に休まれたら困る。何かのグループに属するボランティアが安心。
 - ・ 神戸の”あんすこ”には見守り推進員が配置され、良い制度。
 - ・ ボランティアコーディネーターのような両者を調整する役割が重要
 - ・ 傾聴も車いす補助もそれなりに難しい面があり、思うほど簡単ではない。「それくらいできるやろ」より、「それなりに勉強が必要」という心構えを。

・まとめ

多くの人々がこのフォーラムのテーマに関心が高かった。印象に残った言葉として下に記す。

・ 施設をもっとよく知ってほしい（施設側から）、そしてボランティアとして何が出来るかを自分で探して支援してほしい。それは、レク等ばかりではなく施設スタッフに真に支援できる分野を探すべき。

・ 自分の母親を広島の施設に入所させ、その暖かい雰囲気と環境に満足しているとの事をフロアからいただいた。

・ 包括支援センターについては、行政の考え方と私どもの理解との間には温度差があり、このギャップを埋めることが肝要である。センターのあり方と今後の方針については、丁寧な説明が必要であろう。

・ 課題としては、この種のフォーラムを続編として何時の日か開催し、訪問調査者の報告やパネルディスカッションの内容に十分に時間をかけてみたい。高齢者がどのような施設でどのように暮らし、終の棲家をどこに探すのが良いのか、この難問に直接に取り組んでいく機会が少なすぎるのでは。

・ また、このように多くの参加者を得たことにより、この一年間にわたり行ってきた当該プロジェクトならびに具体的な内容が一定の評価を得たものと考えている。

（このフォーラムは、「独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業による」